場所における身体のあり方

アートの現場から ACAC通信

国際芸術センター青森（ACAC）では、12月20日まで公募によるアーティスト・イン・レジデンスプログラム「OPEN CALL:CALL for OPEN」の展覧会、公演、アーティストトーク等を開催中です。

ダンサー、振付家として活躍する神村恵は、ACACが2009～2011年に開催した、イギリス出身の振付家ショーネッド・ヒューズによる「青森プロジェクト」にダンサーとして参加しており、約10年ぶりに青森に滞在しています。当時も津軽手踊りを習ったり、土地に根付く独特な身体の動かし方を経験したと言います。感覚的に踊るというよりも、場所や物によって身体の動きがある種規定され、振り付けられていることに意識的なダンサーである神村は、美術家と協働してパフォーマンスすることも多い表現者です。

今回は昨年発表したソロダンス作品《彼女は30分前にはここにいた。》を発展させ、ダンサーの思考と動きの痕跡が、場所全体を思考装置としていく過程を描き出そうとしています。彼女が、普段暮らす東京と異なる、青森独自の身体のあり方を探究するために目を付けた調査対象は小屋でした。

地元の方々の協力を得て、里山にある炭焼き小屋、漁師の浜小屋、りんご畑の小屋、日曜大工の趣味を楽しむ小屋、美術家がアトリエとした小屋等を訪れることが出来ました。11月21日に行った中間発表としてのワークインプログレス公演では、小屋の見学時に分けてもらった廃材を用いて三つの小屋をモチーフとして組み立て、パフォーマンスを行いました。

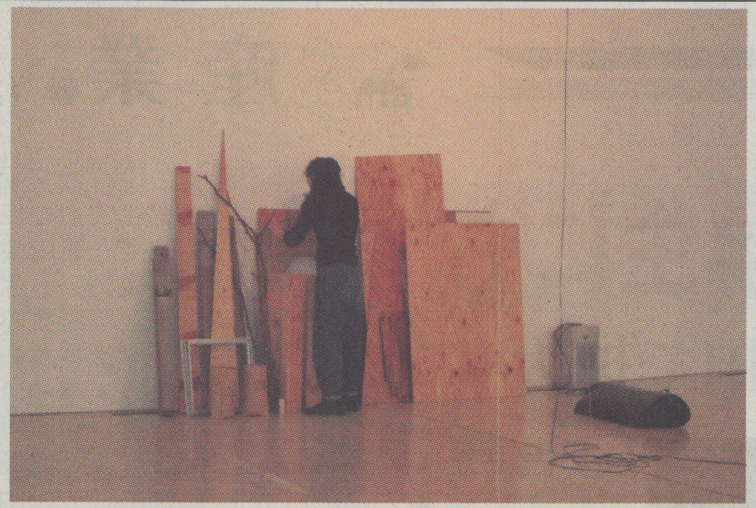
なかでも、彫刻家の故・鈴木正治氏の作品《誕生》（県立郷土館蔵）と制作時に使っていた小屋から発想を得た場面では、作品の木目にも着目し、元々は木として生きていた材からどう彫られたか想像し、彫刻の形を身体で表現したり、小屋から受けた印象と作品の隔たりに言及しました。生前の鈴木氏を知っている方から聞いた話によると、氏の彫刻は木材からあるべき形を彫り出すように制作されており、神村のアプローチは鈴木氏の制作の根本的な部分をしっかりと捉えているようでした。

リサーチと公演以外にも、神村は地域住民とのワークショップを2回開催し、個々人の身体と場所の関係について、参加者と考えを巡らせています。11月25日には青森中央高校美術系列2年生に向け、旧南部藩の地域で踊られている盆踊り「ナニャドヤラ」の複雑な動きを観察して、グループでスコア（譜面）に起こす出張授業を開催しました。

青森で暮らす人々の動きの形を経て制作される、神村恵《彼女は30分前にはここにいた。》#2本公演は、12月12日にACACギャラリーAにて開催予定です。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員　慶野結香）

※第1金曜日掲載。次回は1月8日付を予定しています



神村恵のワークインプログレス公演リハーサルの様子